
夏に

蒲公英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏に

【Nコード】

N2135V

【作者名】

蒲公英

【あらすじ】

夏のある日、向日葵を担いでくる人は。

道の向こうから向日葵を担いで歩いてきた人がいる。

私の、彼氏。

担いだまま電車に乗ってきたらしい。

水揚げの悪い花だから、きつとバケツに挿しておいてもすぐに萎れてしまう。

呆れた私の顔を見て、にこにここと笑っている。

「向日葵、好きだって言ってたでしょ」

確かに、花の中で一番好きだと言ったけど。

バカだバカだと思っではいたけど、本当にバカ？

「電車の中で恥ずかしくなかった？」

「なんだか、じろじろ見られた。知らない婆ちゃんにどうしたのって聞かれたし」

私だって向日葵担いでいる人がいたら、じつと見る。

それに向日葵の莖って荒い毛が生えてて、あたると結構痛い。

とりあえず風呂桶に水を張って、包丁で水切りしてみた。

予定外の重労働に腹が立って声が大きくなる。

「なんで急にこんなもの持って来たの？」

「プロポーズする時は一番好きな花をプレゼントしたいと思ってはい？なんておっしゃいました、今？」

「結婚しよ」

・・・プロポーズは、大輪の向日葵。

返事を強請られ、呆気にとられたままの承諾。

「向日葵って花束用の小さい種類があるの、知ってる？」

「知らない。目的を果たしたから、もういいや」

悪びれないにこにこ顔で言うから、怒るのがバカバカしくなった。

あの日の向日葵はバケツの水で生きながらえて種を熟成させ、大きな植木鉢が毎年、我が家の広くないベランダに置かれる。

太陽に向かつて咲く向日葵は、今でも一番好きな花。

矮性の向日葵を未だに知らないバカが、今年も俺より大きくなったと笑う。

また、夏がやってくる。

f i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2135v/>

夏に

2011年7月26日13時11分発行